

然

音ゼン・ネン
訓 もえる・しかり・しかれども

● 祈りのために捧げられた

神様は焼いた犬の肉のおいが大好き

「犬」という字は実際の犬の姿をそのままかいた象形文字です。祈りや願いの犠牲として「犬」が捧げられたので、字形中に「犬」をふくむ漢字は多くあります。中にはかなり残酷なこともあります。三千年以上前の中国での話です。今の価値観で考えてはいけません。最初は鼻が利く「犬」の紹介から。「犬」に「イ」（人）を加えたのが「伏」です。これは王様などの墓を造る際に墓に悪い虫や魔物、敵が忍び寄りないように墓の下の地中に犬と武人を一緒に埋めたことを表す文字です。「伏」の「人」は武装した兵士のことです。

魔物や敵に、鋭い鼻で最初に犬が気付き、武人がそれをうち破る役目だったのです。殷の時代の古い墓が発見発掘されて、実際に犬と武人が一緒に墓の下に埋められていたことがわかっています。地中に埋められることから「伏」は地に「ふす」の意味となりました。

「状」（状）も、生け贄としての「犬」をふくむ漢字です。城壁などを造る時に版築という工法があります。板と板の間に土を入れて、杵でつき固める工法です。それに使う板の形が旧字体「状」の「月」の部分。城壁を造る際にも犬を犠牲に捧げ、城壁がちゃんとできることを祈ったのです。その工事の進み具合、状況のことから物や人の形状の意味となりました。

「犬」をふくむ字で最も印象的なのが「然」です。これは「犬」「月」「灃」でできています。この場合の「月」は夜空の月ではなく、「月」は「肉づき」で「肉」のこと。「灃」は「火」です。神様は犬の肉を焼いたにおいが大好きでした。「犬」の「肉」を「火」で燃やして、そのにおいを天上の神様に届ける字が「然」です。だから「然」は「もえる、もやす」という意味で、「燃」の元の字でした。しかし「然」が「しかり」などの意味に使われるようになり、もう一つ「火」を加えて「燃」という文字が作られたのです。

口をきかずにだまっている沈黙の「黙」の「犬」も生け贄となった犬のことです。「黙」の旧字「默」は「犬」と「黒」を合わせた字ですが、「黒」には「だまる、しずか」の意味があります。「黙」は黙って喪に服している文字です。その時、「犬」を生け贄として埋めて喪に服しました。死者を追悼する喪の礼では、三年間はものを言うことはタブーでした。

古代文字



犬



伏

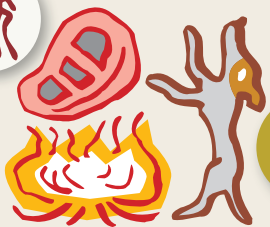


旧字

状

状

古代中国の古いをみると、犬を生け贄の犠牲として使う例が多い。天の神を祭るには犬を焼き、地の神を祭るには犬を埋めた



然

【つながる漢字】

犬・伏・状(状)・然・燃・黙(黙)